

松井屋源右衛門

先祖は大伴家持と越中へ

富山売薬の起源についての話で必ず登場する名前が、松井屋源右衛門である。

『富山市史 通史(上)』では、富山売薬の起源について諸々あるとし、その一つとして、備前国(現在の岡山県のあたり)の医師・万代浄閑が、天和3年(1683)、富山2代藩主正甫に招かれ、反魂丹を調整し、元禄年間には正甫が諸国へ売り広める契機を作った。その反魂丹方書を近習の日比野小兵衛が預かり、その後2、3年を経て、城下町の薬種屋松井屋源右衛

門に調整法が伝授された——という説を紹介している。

この松井屋源右衛門とはどんな人物なのか調べていたところ、『元祖反魂丹』という本を見つけた。この本は、橋本友美氏が、松井屋源右衛門の子孫である荻原家の依頼で、同家に伝わる文書、過去帳などを調査、整理し、荻原みゆき氏の随筆とあわせてまとめた非売品の本である。

それによると、先祖は、大伴家持が都から越中国司として任命された時についてきて、住みついたそう。その後、戦国時代の武士となり、天正10年6月5日、柴田勝家・佐々成政の攻撃で魚津城が落城した時に上杉方としていて、一同と切腹したという。その後、大和の国(奈良県)から縁故の者が集まり、皆で相談して、各地に薬草を植えさせ、干したり、キ

ザミ方を教え、いろいろと世話をして、薬屋を創業したそう。

大和国にはもともと縁者が多かったそう。伊勢国(三重県のあたり)に本根伝兵衛合薬屋という薬屋があり、その人が、備前岡山の人で薬草に詳しい、武士で大変律儀な人物を、天正16年に富山へよこしてくれたという。親子で来て、姓は松井と称した。荻原家の先祖の吉兵衛は、その娘を嫁にした。ここから、屋号を松井屋としたのだという。

余談だが、松井屋の手代で、富山売薬行商の始祖とされる八重崎屋源六は、八重津港から出た山崎という越中武士だそう。

吉兵衛の嫁の父、松井氏は、万代常閑とは縁故であったので、常閑(8代?)も、備前から越中に、畑の薬草を見たり、薬の指導でしばしば見えたという。

松井屋で自ら研究した正甫公

吉兵衛の長男の市兵衛は、今でも研究所もつくり、調剤する所も建て、目薬や痔の薬、日本で最初の歯磨粉も作ったそう。

松井屋源右衛門が、吉兵衛や市兵衛とどういう関係があるかはわからないが、正甫公より3歳年上だったそうで、逆算すると正保2年(1645)生まれとなる。

天和3年(1683)、岡山の万代常閑(11代)は松井屋に来ていて、ちょうど正甫公が調薬に凝り始めたところで、源右衛門は常閑を伴ってお目通ししたという。常閑は伝来の秘法「反魂丹」を松井屋の調剤室で調剤して献進したところ、正甫公は大変喜ばれ、自ら常閑から製法を習い、「このような神秘的な効能のある薬は秘密にすべきにあ

らず」と、朝から晩まで、松井屋の研究室で熱心に研究し、熊胆の鑑定まで覚えられ、薬草にも随分興味をもつて、乾草の具合も厳しく調べられたという。

ちなみに、正甫公は、松井屋の研究室のことを「志甫屋」と呼んでいたそう。ここは正甫公好みになっていて、床の間は立派で、部屋の飾り物・軸物・茶器類等、全てお城から運び込まれたという。

荻原家松井屋の家紋は梅鉢で、この頃、正甫公から頂いたものと思われること。

備前岡山から書生が2人で常閑を迎えに来たが、正甫公は常閑が戻られる事を惜しまれ、いたわしいくらいであったという。「来年は必ず又来て下さい、山田のお湯にお連れするから」と約束され、「山田の湯で、是非とも常閑さんと研究したい薬草もあり、お湯もよく

体に効くので案内したい、又変わった話もあります」と、とても有名残りを惜しまれたそう。

なお、正甫公が漢方薬研究に力を入れたのは、自身に持病があり、急病に苦しみ、晩年には藩医が18人に及ぶほどだったことが根本にあったよう。

正甫公の時代には、八尾の蚕種配置業も発展した。蚕種とは、蚕蛾に紙上に卵を生みつけさせたもの。蚕種行商は、翌年代金をもらう先用後利で、売薬の売り方の先駆をなしたという。飛騨への行商から始まり、化成期(1804)1829)には全国の4分の1を販路とした。この発展過程は富山売薬の発展過程と非常に似ている時代も重なるという。

また、正甫公は、八尾和紙を蚕種・売薬の必要に対して、用途別に多面的に発展させている。

誰でも与えられた反魂丹処方

正甫公には、反魂丹を松井屋の専売にさせる気はすこしもなかったという。富山城下の下々まで賑わうようにすることが強い願いであり、反魂丹処方希望する者には誰でも与えられたそうだ。売業者は処方を写してくれば反魂丹をつくることのできた。

また、万代常閑(11代)の伝えられた反魂丹は、富山以外にも、岡山の万代家が売っていたのはもちろん、江戸の柳原心敬院でも享保年間(1716~1736)には調剤されていたという。紫靈丹、麝香丸とも呼ばれ、室町將軍足利氏の持薬であったされる。木香(健胃・整腸)、陳皮(健胃・鎮嘔)、大黄(健胃・緩下)、黄连(腹痛・下痢)、熊胆(鎮痛・胆汁分泌促進)

が主成分で、消化器と霍乱・鎮痛の薬である。

富山反魂丹と名付けて全国に売られるからには、売薬処方が各家の秘伝とはいえ反魂丹だけは成分上の共通点が必要であった。実際に、反魂丹旧記、松井屋(荻原家)、滑川蓬沢屋の処方方はほとんど同じであるという。このように反魂丹処方が公開的であったからこそ、反魂丹の質の管理が可能になり、大工場がなくても全領的な反魂丹量産が成立したのだそうだ。

元禄2年(1689)、松井屋の手代の八重崎屋源六による売薬行商が始まった。源六は、岡山の常閑を行商毎にたずねて、黄蓮・熊胆など越中の名品を届けたという。11代常閑の死後、源六は分骨してもらい、妙国寺(富山市梅沢町)に墓を建てている。

さて、松井屋源右衛門が正甫

公の忠実な実行者として反魂丹売薬の産業化に努力したこと、松井屋は繁栄した。享保2年(1717)に源右衛門がなくなると、孫三郎が継いだ。ところが、荻原家の過去帳に松井屋孫三郎の名はないという。また、松井屋松井孔明堂)の屋号も以後見られなくなる。国学が尊王思想に発展し、倒幕を意図する運動になり、宝暦・明和事件が発生しているが、正甫公の8男・利寛が尊王運動に関係していたという。前田家と近い松井屋は利寛を援助していたため、痕跡を消す必要があったようだ。孫三郎は富山を離れ、吉平(弟?)が屋号を志甫屋と改め、自らを志甫屋初代としたという。しかし、吉平の次の喜平衛は、源右衛門の名で、「元祖反魂丹伝来之儀並家之由緒等書上申候」を藩に提出し、松井屋を復活させたという。